【エッセイ】 私は三つの立場から福祉と関係している。
　父が晩年に特養ホームでお世話になった。自宅から徒歩とバスで母が毎日2回食事の介助に行き、週末には私も母と一緒に通った。父は亡くなる数日前までホームで過ごさせて頂いた。現在は、母が在宅でホームヘルパーさんの入浴介助を受け、ケアマネさんには様々な相談に乗って頂く。週2回、デイサービスにも通っている。
　二つ目は、私はチンドン屋の一員としてサックスを吹き、よく福祉施設にも慰問に行く。地元の市役所職員が中心となり昭和52年に発足した、多分日本最古のボランティア・チンドン。老人ホームではお年寄りが涙を流して喜んでくださる。障害者施設の毎年のお祭りでは、車椅子を20台位連ね、チンドン屋の演奏に合わせてJR線路沿いの道を行進する。
　三つ目は仕事で、通算5社の老人介護、1NPOの障害者支援団体とお付き合いをしてきた。

　これらすべてについて感じるのは、福祉施設で笑顔が美しいこと。入居している人も働く人も、実にいい笑顔を見せてくれる。お互いに感謝の気持ちが笑顔になっていると思う。チンドン屋も同様で、私も参加して22年になるが、喜んで頂けるからこそ演奏者も楽しく笑顔になれる。
　勿論、笑ってばかりもいられない。どの業界でも人間関係のトラブルはつきものだが、福祉施設も例外ではない。私も経営者と一緒に労働基準監督署に出頭し、合同労組との団体交渉に臨んだこともある。
　それでも福祉施設には、人をほっとさせる安心感がある。社長に会うべくデイサービスを訪問すると、とにかく皆さん声がでかく雰囲気が明るい。時に大爆笑。私は仕事で行くのだが、サービスルームを通過するだけで元気をもらえる。心が和む。
　辛いことがあったら、無理にでも笑い飛ばしましょう。笑顔に隠された、同じ量の涙。
　最後に　太宰治の一節を真似て
　　福祉には明るい笑顔がよく似合う
　　『笑』と書いて『ナミダ』とルビを振る